慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	日本統治時代の台湾における日本語教育に関する研究：「構成式話し方教授法」を中心に
Sub Title	
Author	金澤, 奈央(Kanazawa, Nao)
Publisher	慶應義塾大学日本語・日本文化教育センター
Publication year	2015
Jtitle	日本語と日本語教育 No.43 (2015. 3) ,p.81- 81
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	大学院文学研究科日本語教育学分野修士論文要旨
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00189695-20150300-0081

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

慶應義塾大学　日本語・日本文化教育センター紀要
『日本語と日本語教育』43：81（2015.3）

〔大学院文学研究科修士論文〕

日本統治時代の台湾における日本語教育に関する研究
―「構成式話し方教授法」を中心に―

金　澤　奈　央

台湾は明治 28（1895）年の下関条約締結から昭和 20（1945）年の終戦までの 50 年間、日本の植民地統治下にあり、領台当初から日本語教育が行われた。領台初期は、植民地統治を行う上で必要な通訳の養成という実務的な目的のための年長者対象の日本語教育であった。しかし、次第に公学校という台湾総督府が設置した台湾人対象の教育機関での年少者対象の日本語教育となった。同様に教授法も漢字・漢文や台湾語を媒介とした対訳法から、日本語のみで日本語を教える直接法へと変化していった。

本研究は 4 章構成であり、大正期に考案され公学校で採用された「構成式話し方教授法」をテーマとする。第 1 章で 50 年間の台湾の日本語教育の流れを考察し、第 2 章で大正初期の公学校で行われた直接法の授業を当時の資料を調査し分析した。そして第 3 章で本研究のテーマである「構成式話し方教授法」の理論・教授形態・具体的な教授案を、当時の教育雑誌記事や教師用指導書などの資料を調査し分析した。第 4 章では昭和期の「構成式教授法」の教授の実態や問題点、新たな教授法の模索について考察した。

「構成式話し方教授法」は大正 9 年前後から台北師範学校附属公学校で研究され、翌年同校で開催された研究発表会で明らかにされた教授法である。大正初期に公学校の日本語教育は話し方・読み方・綴り方・書き方の四つに授業が分科されていたが、この教授法は新たに聴き方を加えて五つの分科にし、各分科の定義と教授内容・達成目標を定めた。また話し方を、一人でまとまった話をする談話と二人以上で行う会話の二つに分け、教授形式も、単語句の教授や難語・新語を含んだ話し方の教授をする言語教授と、課題提示もしくは自由選題で行う自由発表に分けた。これらを踏まえて、話し方の授業を談話言語教授・談話自由発表・会話言語教授・会話自由発表の四つに分けた。そして、児童が自己の経験や思想感情を交えて発表し、それを教師だけでなく発表者以外の児童も批評するという教授法であった。

この新たな教授法は、従来の教師から児童への一方的な流れの授業を、児童が自発的に学ぶ「自学」の授業に目指した一方で、教師には授業をコントロールする力や児童が発表を構成できるように的確な質問が出来るような高い指導力を要求したことが分かった。昭和期には発表の構成に時間がかかり過ぎる、十分な発表時間の確保が難しいといった問題も指摘されたが、的確な解決策は提示や新たな教授法の考案はされず、結果的には終戦まで公学校の日本語教育の主要な教授法として継続されたと考えられる。